



巻頭言

ダウンサイズのすすめ

A Proposal for downsizing

●
米沢富美子 Fumiko YONEZAWA

慶應義塾大学名誉教授



私は昨年10月、我が家のフローリングを思い立った。工事のためにはまず部屋を空ける必要がある。ささやかながら6LDKの部屋々に荷物がいっぱい。それを300個近いダンボール箱に詰めて倉庫に移したのが12月末だ。家から2、3分の所にあるこの倉庫にも、すでにながりの本が入っている。今回運んだ荷物のうち、8割が本や論文・資料などの紙類。1割が衣類で、残りの1割が食器その他だ。

年明けから工事が始まり、1月末に完成。工事中は、庭にある4坪ほどの離れで暮らした。ここも本を置くために建てたもので、両側の壁にスライド式の本棚が片側2個ずつ、計4個入っている。工事中の執筆や研究に必要な本や資料はここに移し、パソコン、プリンタ、スキャナと、生活に必要な最小限のものだけを持ち込んでキャンプ生活のような3週間を過ごした。

その生活を通して衝撃的な事実が判明した。倉庫に移した荷物なしでも生きていけるということだ。あの300個の段ボール箱は何だったのだ！

この経験で、ダウンサイズの快適さを実感した。広々と床の見える部屋がうれしくて、倉庫の荷物を戻さずにひと月余りを経たところで地震が来た。東京は震度5強だったから、あの荷物があつたら惨状だったろう。

そして福島原発事故の発生。私は物理学者として原子炉で進行中の事態が手に取るようにわかり、恐怖と憤りでカテコールアミンが分泌されたいらしい。徹底した減塩食で120-80に保っていた血圧が、いきなり上が200以上、下が100以上の危険域に突入。生まれて初めて血圧降下剤を服用した。

放射能汚染された水が海に流される。空気も土地も飲み水も魚も農作物も、今後数十年にわたって汚染され続ける。しかも、国の「暫定基準値」は都合よく引き上げられ、危険性が見えなくされる。そもそも国の暫定基準値には科学的根拠がない。

政府や東電による情報隠蔽の壁を越えて、「地震国日本での原発はやめるに如かず」と議論されたのも束の間。「何もなかったことにする」「みんなで被れば怖くない」のような雰囲気になり、災害に強い原発を作る話まで出されるようになった。

原発停止による電力不足で日本の経済活動が低下すると主張する向きもあるが、国内の原発54基を全部停止しても、必要最低限の電力供給は可能だ。節電、省エネ機器、自然エネルギー発電などで、十分にまかなえる。

節電や省エネはダウンサイズを基盤とする。ダウンサイズは、後退や敗北ではなく、本当に望ましい方向への前進であり勝利である。今我々すべてが、生き方の変革を迫られている。

原発の真実を伝えること。そして、省エネ機器や安全な発電法の開発によって、例えば10年後を目標に原発不依存の仕組みを作り上げること。科学者としてできることは、そういうことかもしれない。

英訳版は639ページをご参照下さい。English version, see pp 639.

© 2011 The Chemical Society of Japan